

福島市荒町における人口高齢化の要因

平 井 誠

キーワード：福島市荒町，人口高齢化，聞き取り調査，移動歴

I はじめに

近年の日本では，高齢人口の増加と若年人口の減少により，人口に占める高齢者の割合が急激に上昇している。この現象は人口高齢化とよばれ，人口学・社会学・老年学・心理学などの多様な学問分野において研究が進められている。

地理学分野では，東北地方の県庁所在都市を対象とした香川（1987）をはじめとして，札幌市，名古屋市などの都市部において，人口高齢化の地域的な展開やその要因を解明する研究がなされてきた¹⁾。その結果，都市内部における人口高齢化には地域的な差異が存在することや，非高齢人口の減少と高齢人口の増加が，人口高齢化の大きな要因であることが指摘されている。

従来の研究は，国勢統計区や小学校区を単位地区として，高齢人口比率や年齢コーホートの変化を分析している。そのため，統計数値の分析から非高齢人口の減少や高齢人口の増加を知り得ても，なぜそのような人口構造の変化が起こったのか，というメカニズムはいまだに明らかにされていない。

人口高齢化の進展に地域的な差異が存在するということは，非高齢人口や高齢人口の変化をもたらすメカニズムに，地域的な特性や要因があるのではないかと考えられる。そのため従来の研究を踏まえ，そのメカニズムを明らかにし，人口高齢化の地域的な要因を見出すことは地理学から人口高齢化にアプローチする際に意義があると思われる。

このメカニズムを明らかにするには，従来の手法に加えて，さらにミクロなレベルからも人口高齢化を検討することが必要だと考えられる。なぜなら，高齢者を対象に詳細な聞き取り調査を行うことによって，はじめて，統計数値の分析だけでは表出しない地域的な特性を明らかにすることができると考えられるからである。

そこで本報告は，福島市荒町における人口高齢化をミクロレベルから検討し，その要因を明らかにすることを課題とする。荒町は福島市の中でも人口高齢化が進展している地域である。

課題を達成するために，以下の手順をとる。まずⅡ章において，荒町を含む，福島市中央地区における人口高齢化を，人口の変化から考察する。これは，従来の人口高齢化研究の手法に相当する。

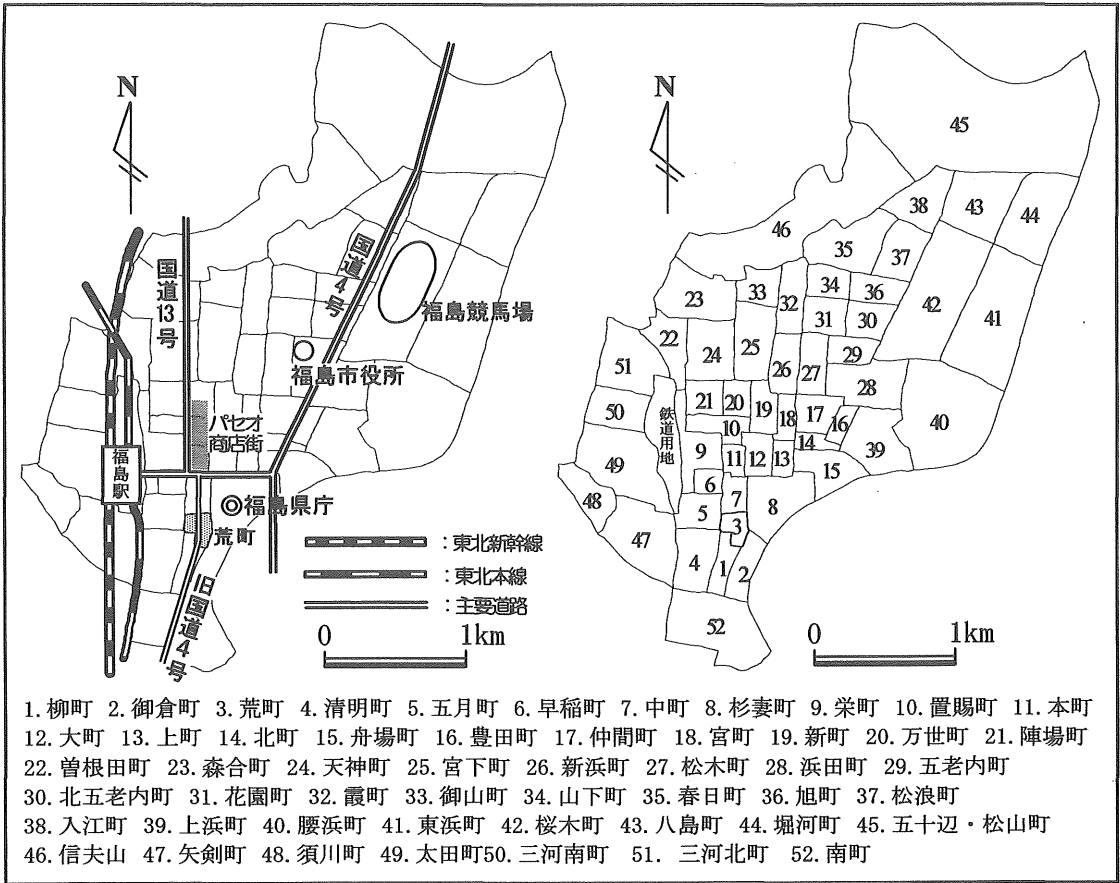
Ⅲ章では福島市荒町に居住する高齢者を対象に行った聞き取り調査をもとに，ミクロレベルから人口高齢化の要因を検討する。

Ⅱ 福島市中央地区における人口高齢化

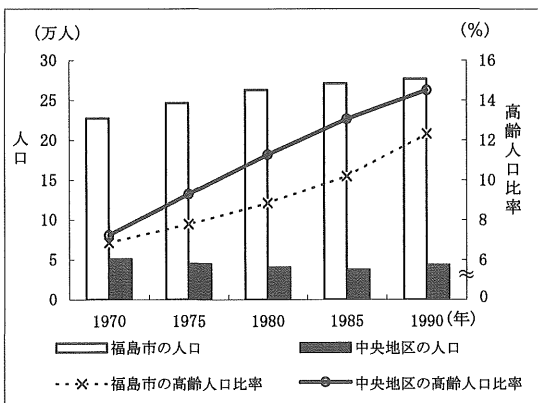
Ⅱ-1 高齢人口比率の変化

福島市中央地区²⁾は，福島県庁，福島市役所が立地するとともに，国道や鉄道の結節点としても機能している。広大な市域を持つ福島市の都心部と位置づけることができる（第1図）。

第2図に，1970年から1990年における，福島市中央地区および福島市の人口の変化を示した。福島市の人口は一貫して増加しているが，中央地区の人口は減少傾向にある。



第1図 福島市中央地区の概観（1996年）

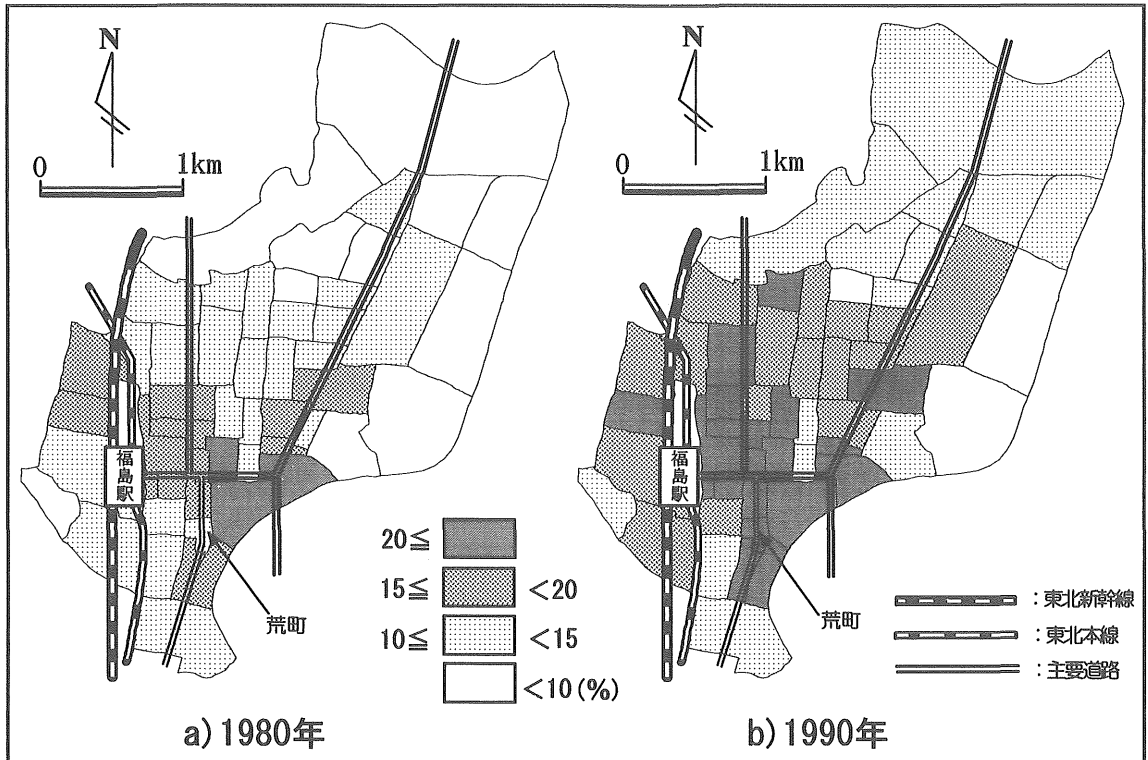


第2図 福島市および福島市中央地区における人口と高齢人口比率の変化（1970年～1990年）

（資料：国勢調査）.

高齢人口比率³⁾は福島市と中央地区の両者において直線的な増加を示している。しかし、1970年時点では、中央地区と福島市のそれはほぼ等しかったが、1990年には、中央地区のそれは福島市の1.18倍になった。このことは、中央地区の人口高齢化が福島市よりも速く進展したことを示している。

第3図に、1980年、1990年における福島市中央地区の町別の高齢人口比率を示した。1980年時点では、中央地区の南部に高齢人口比率が15%を超えている地域が偏っている。また、杉妻町、舟場町、大町では20%を超えており、中央地区の中でも特に高齢化が進展している。これらの地区は、福島城下町の町人町を起源とし、福島市の中でも最も古くから開発が始まった地域である。明治以



第3図 福島市中央地区における町別の高齢人口比率（1980年，1990年）

（資料：国勢調査）.

降は信達地方の養蚕業の中心として発達した⁴⁾。その後は旧国道4号および福島駅を中心としていくつかの商店街が形成され、福島市の商業中心として発達した地域である⁵⁾。このように古くから開発された地域で、まず、人口高齢化が進展した。また、中央地区の北部は南部に比較して高齢人口比率が低く、人口高齢化はあまり進展していなかった。

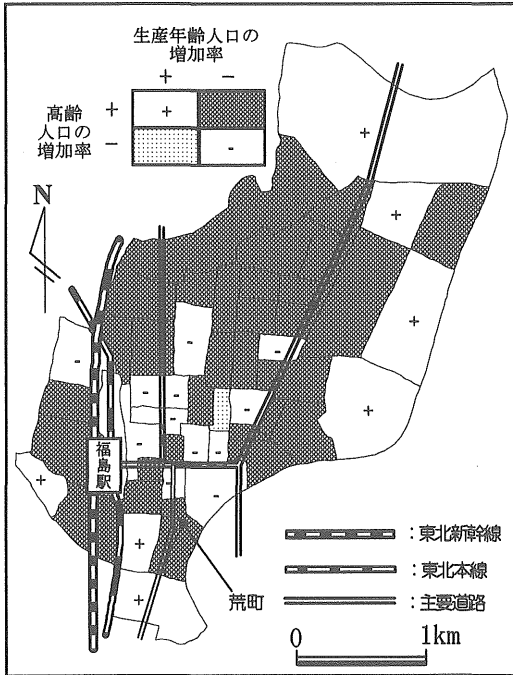
1990年になると、1980年の時点で高齢化が進展していた中央地区の南部を中心に、人口高齢化がさらに進展し、高齢人口比率が20%を超える地区が増加した。中でも、旧国道4号沿いにある荒町は、高齢人口比率が14.1%から20.1%へ増加しており、急激な人口高齢化が進展した地区の1つである。また、中央地区の北部でも高齢人口比率は上昇しており、中央地区の全域で人口高齢化が進展したことを示している。

以上のことから、1980年から1990年にかけて人口の高齢化が中央地区の全域で進展していることが指摘できる。特に、福島駅周辺の古くから発達した地域は相対的に高齢人口比率が高く、それらの地区からの距離に比例して、高齢人口比率が低くなる。

Ⅱ-2 人口の変化と人口高齢化

第4図に、1980年から1990年における中央地区の生産年齢人口および高齢人口の増加率を示した⁶⁾。さきほどの第3図を参照しつつ、1980年から1990年にかけての中央地区における人口の変化と人口高齢化を検討する。

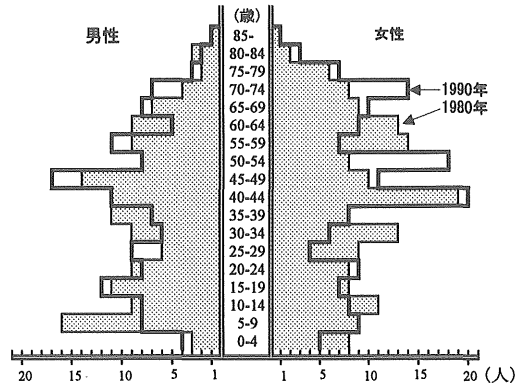
中央地区の外縁部では、生産年齢人口と高齢人口の両者が増加しており、人口全体が増加している。そのため高齢人口の絶対数が増加しているにもかかわらず、第3図の通り、高齢人口比率は他



第4図 福島市中央地区における町別の人口変化
(1980年～1990年)
(注) +: 増加率1.0以上, -: 増加率1.0未満
(資料: 国勢調査).

の地区よりも低い水準にとどまっている。
対照的に、生産年齢人口と高齢人口の両者が減少している地域が中央地区の中心部に見られる。特に、1980年代に再開発が行われた福島駅東部地区では、1988年には福島駅ビル(福島ルミネ)が、1989年には本町、中町、置賜町にパセオ470がオープンしたことに伴う郊外への移動が起これり、人口が減少した⁷⁾。本報告が対象とする1980年から1990年はこの再開発の時期に当たる。また、市役所が立地する五老内町や、県庁が立地する杉妻町でも人口が減少している。

これらの地区を除き、中央地区では生産年齢人口が減少し、高齢人口が増加している。そのため、高齢人口の比率が相対的に高まり、人口高齢化が進展した。そこで、Ⅱ-1において中央地区の中でも急激な人口高齢化が確認された荒町を例に取り、人口の変化と人口高齢化の進展を確認する。



第5図 福島市荒町の人口ピラミッド(1980年, 1990年)
(資料: 国勢調査).

1980年から1990年に、荒町の人口総数は306人から298人に減少した。なかでも、若年人口は56人から42人へ約25%が減少し、生産年齢人口も207人から196人へ約6%減少した。対照的に、高齢人口は43人から60人へ約40%増加した。このことは荒町の人口ピラミッドからもよりはっきりと確認できる(第5図)。1980年から1990年にかけて、40歳未満のほとんどの年齢層でピラミッドの幅が狭くなっているのに対して、65歳以上の年齢層は幅が広がっている。非高齢人口が減少し、高齢人口が増加していることが明らかである。

Ⅲ 福島市荒町における人口高齢化の進展過程

本章では、福島市荒町を事例地区として、ミクロレベルから人口高齢化の分析を行う。

Ⅲ-1 荒町に居住する高齢者の移動歴

上述した統計数値の分析では、荒町の高齢者が増加したことしか把握できない。また、コーホート分析を援用しようとしても、荒町のような小地域における死亡に関する統計は入手することが困難である。そのため、高齢者の増加が荒町の居住者の加齢に伴う増加(自然増)によるものなのか、または、新たな高齢者の流入による増加(社会増)

であるのか、という増加の質的な面を把握することは困難である。

そこで本節では、荒町に居住する高齢者に対して聞き取り調査を行い、移動歴をライフパスグラフを用いて検討する⁸⁾。ライフパスグラフを用いることで、現在荒町に居住する高齢者が、いつ、荒町に流入したか、ということ把握することができる。

本報告では第二次世界大戦による一時的な移動は除外し、その他の移動を対象とした。実際の調査は、荒町の老人会（福島市荒町寿会）の加入者（43名）に対して、訪問面接によって実施し、男性7名、女性8名、計15名から回答を得た。

第6図に荒町に居住する高齢者のライフパスを示した。縦軸は時間を、横軸は地域を表す。ただし、横軸は単に居住地を示すのみであり、荒町からの距離や方向は考慮していない。

第6図-aから、男性のライフパスを検討する。男性7名のうち、4名の出生地が荒町である。彼らのライフパスは、荒町で始まり直線で現在へ続いており、今までに1度も移動を行っていない。このタイプの事例を以下に示す。

第6図中2番の男性（以下、A氏）は、1914年に荒町に生まれた。A家は荒町において代々小売業を営んでおり、13代目に当たるA氏が出生した当時、A家は米屋を経営していた。A氏が27歳（1941年）の時に、荒町から南へ約6km離れた旧杉妻村田沢（現福島市田沢）の女性と結婚した。その際には女性（第6図10番）がA氏宅へ移動したため、A氏は移動を行わなかった。A氏によると荒町で出生した男性の結婚相手は、現在の福島市域内の女性である場合が多かったという。その後、提灯の小売業へと業種を転換したものの居住地の変更はなく、現在に至っている。A氏によると、現住地が代々A家の土地および家であること、また、自営業であったために転勤がないことから、移動する必要はなかったという。

男性で、荒町外で出生した3名は、大阪、仙台、安達郡東和町と、荒町から比較的離れた地域で出生している。第6図3番と6番の男性はそれぞれ

東京の学校へ進学するために移動を行い、卒業後に就職のために再び移動を行った。これらの移動は大阪から東京へ、または東和町から東京へと、空間的に広い範囲におよんでいることが特徴的である。また第6図3番（B氏）は、結婚後に、福島市仲間町の借家に居住していたが、荒町に土地と家を購入し移動した。上述したA氏とは異なり、荒町外で出生した場合は、住宅や土地を購入するためある程度の資金が必要となる。B氏のように、結婚後に借家に居住し、資金が貯まった段階で住宅を購入して移動を行う場合が多いと思われる。そのため、荒町外で出生した男性は、比較的多くの移動を経験している。

このように、男性の場合は、荒町で生まれたか否かで、移動歴や移動の空間的な範囲に大きな差異が見られる。

次に第6図-bから、女性のライフパスを検討する。まず出生地に注目すると、荒町で出生した人は8人中1人に過ぎない。それに対して、現在の福島市域内で出生した人が4名、福島県内で出生した人が2名であり、その他の地域で出生した人はいなかった。先に検討した男性と比較すると、女性の出生地は荒町に比較的近接した地域に限定されている。

移動理由を検討すると、すべての女性が結婚による移動を行っていた。その他の理由による移動は、幼いときの家族的な理由による移動⁹⁾や、結婚後に、住宅の老朽化を理由に新居へ家族で移動する場合（第6図15番、22番）であり、女性本人の個人的な意思よりも、世帯主の意向に影響される移動が多かった。また、進学、就職移動はみられなかった。このように、女性の移動歴は非常によく似ており、大きな差異は見いだせない。

高齢者が流入したかどうかを判断するのに、高齢者がいつ荒町に移動したか、という点を検討する（第1表）。移動を経験した11名の中で、9名が1940年から1955年までの15年間に荒町に移動していた。移動時の年齢は20歳から33歳であり、比較的若い年齢で荒町に居住を始めている。

以上のように、ほとんどの移動が1960年以前に

第1表 回答者の荒町への移動年と移動時の年齢

番号	性別	移動年	移動時の年齢
1	男	*	*
2	男	*	*
3	男	1950	31
4	男	*	*
5	男	1986	62
6	男	1945	20
7	男	*	*
8	女	1946	33
9	女	1941	26
10	女	1941	21
11	女	1950	30
12	女	1948	28
13	女	1986	65
14	女	1951	23
15	女	1955	22

(注)番号は第6図に対応

*：移動なし

(1996年7月の聞き取り調査より作成)。

行われていた中で、1980年以降に荒町に移動した事例が2名見られた。すなわち、第6図5番と13番の夫婦の移動である。彼らは、1953年から荒町の西隣の清明町に居住していたが、住宅が老朽化したために、1986年に荒町に住宅を購入し移動した。移動時の年齢は男性62歳、女性65歳であり、高齢者が荒町へ流入した事例である。わずか1件の事例ではあるが、彼らの移動によって、13名の高齢者が15名へ約15%増加した。この時期に生産年齢人口が減少していることを考え合わせると、彼らの移動が荒町の高齢者の増加に与えた影響は必ずしも小さくない。

以上のことから、1980年から1990年における荒町の高齢人口の増加は、1960年以前に荒町で居住を始めた、居住者の加齢に伴う増加（自然増）によるものが大部分であることが示された。ただし期間中に、事例は少ないものの、高齢者の流入（社会増）もみられた。

Ⅲ-2 荒町における人口高齢化の要因

以上の現象が荒町で起こった要因を聞き取り調査の結果から推察すると、以下のことが指摘できる。すなわち、荒町を含む、旧国道4号に沿った地域が福島市の商業の中心として機能していたのは1950年頃までであった。その後、商業の中心が福島駅前へと移動するのに伴い、荒町の商店の収入が減少しはじめた¹⁰⁾。荒町に古くから居住していた土地所有者は、土地の一部を売却したり、賃貸住宅を経営することによって、収入の減少に対応した。住宅を求めて人が集積したために、人口も多かった（第2表）。本報告で調査した高齢者も、この時期に荒町に流入した場合が多かった。

1970年代になると、土地所有者は自動車の増加に伴う駐車場の需要に対応し、借家の経営から月極駐車場の経営に転換した。その要因は荒町が福島駅や福島県庁へ近接していることである。この土地利用の転換により、住宅のストックが減少した。そのため、人口が流入することができなくなり人口は停滞傾向になった（第2表）。その結果、荒町には古くからの土地所有者と、1950年前後に土地を購入して流入した移動者のみが残った。彼らが年を重ね、荒町の人口高齢化が進展した。

すなわち、人口高齢化の要因である、非高齢人口の減少には、土地利用の変化に伴う住宅ストック

第2表 福島市荒町における人口および世帯数の変化（1950年～1990年）

年	人口(人)	世帯数(世帯)
1950	882	183
1962	772	175
1965	623	162
1970	532	160
1975	402	123
1980	306	96
1985	338	121
1990	298	108

(資料 1962年：福島市住民登録台帳、1950年、1965年～1990年：国勢調査)。

クの減少という、荒町の地域的な特性が影響していたのである。

IV おわりに

本報告の結果は以下のように要約される。

(1)福島市中央地区は、地区の全域で人口高齢化が進展している。特に、福島駅周辺の、古くから発展した地域は人口の高齢化が著しい。

(2)荒町を事例として、人口高齢化が進展した期間における、人口の変化を検討したところ、非高齢人口の減少と高齢人口の増加が確認された。

(3)荒町の高齢者の移動歴を検討した結果、荒町における高齢人口の増加は、居住者の加齢による自然増であることが分かった。ただし、高齢者が荒町へ移動した事例が確認されたことから、高齢人口の増加に社会増も影響している可能性が示唆された。

(4)非高齢人口の減少の一因として、荒町の土地所有者による土地利用の転換に伴う住宅ストックの減少が示された。すなわち、非高齢人口が増加するために必要な条件が消失した。

本報告は人口高齢化をミクロレベルから検討するために、高齢者自身への聞き取り調査を中心として分析を行った。その結果、上記の(3)、(4)のような、統計数値の分析のみでは見いだすことのできない要因を得ることができた。特に、(4)は、荒町の地域的な特性と密接に関連している。このことは、地理学から人口現象にアプローチする際に、フィールドワークが有力な手段となり得ることを示唆していると思われる。

しかし、本報告では、聞き取り調査の結果を他の資料から確認することや、高齢者が荒町に居住し続ける要因の分析を行うことはできなかった。今後の課題としたい。

現地調査の際には、福島市役所高齢福祉課 佐藤敏雄氏、福島市荒町寿会会長 小杉和郎氏、民生委員 渡辺之忠氏、荒町寿会会員の皆様をはじめ、多くの方にご協力をいただきました。

本報告の作成には、佐々木 博先生、斎藤 功先生、手塚 章先生、須山 聡先生にご指導いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

[注および参考文献]

- 1) 香川貴志(1987):東北地方県庁所在都市内部における人口高齢化現象の地域的展開. 人文地理, **39**, 370-384.
香川貴志(1990):金沢市における人口の量的変化と高齢化. 東北地理, **42**, 89-104.
斎野岳彦(1989):名古屋市における人口高齢化の地域的パターンとその考察. 東北地理, **41**, 110-119.
斎野岳彦(1990):札幌市における人口高齢化の地域的考察. 東北地理, **42**, 105-110.
高山正樹(1983):大阪大都市圏の高齢化に関する考察. 経済地理学年報, **29**, 36-57.
- 2) 中央地区の区分は、『福島市統計書』の地域区分でも、「本庁地区」と記載されたり、福島駅西側の野田地区も含めて「中央地区」と記されるなど、変化がみられるが、本報告では第1図に示した地域を「中央地区」とする。
- 3) [高齢人口比率] = [当該地区の65歳以上人口] / [当核地区の総人口] × 100
- 4) 商業機能の発展に伴い、東北地方で最初の日本銀行支店が明治32年(1903)に現在の福島市本町に開設された。
- 5) 日本地誌研究所編(1971):『日本地誌4 宮城県 山形県 福島県』, 二宮書店, 特に450-452.
- 6) 生産年齢人口は15-64歳人口, 高齢人口は65歳以上人口を示す。また,
[人口増加率] = [当該地区の1990年の人口] / [当核地区の1980年人口]
- 7) 例えば、パセオ470の立地する福島市本町では、1980年には人口93, 世帯数29であったが、1990年には54人, 17世帯に減少した。

- 8) ライフパスグラフを用いて移動歴を検討した研究として、須山(1993) がある。
須山 聡(1993):職人の地域的移動パターンから見た輪島漆器の生産地域の拡大. 地理学評論, 66A, 597-618.
- 9) 聞き取りでは、養子縁組のために生家から移動した事例があった。
- 10) 荒町に立地していたデパート「中合」が、1973年に福島駅前に移転したことが、商業中心の移動の象徴と捉えられる。